省行政長官

カイ・フン
訳　田中あき

ヴバン監獄において最も心の踊る時間は、週一回の手紙配布の日である。この際の歓びはおおっぴらの狂喜乱舞であって、家族や友人からの便りを受けとる遠地にいる人間の胸に秘める私的な歓びではない。

監獄職員が背に黄色の袋を担いで駐屯所への坂道を上り、収容人たちが作業をおこなう二つの草原の丘を通り過ぎて行くと、きまって収容人たちの喝采で迎え入れられる。監獄内に残って溜め池で日向ぼっこをしていた麻痺患者たちは、いそいそと立ち上がり身体を伸ばして先が尖った竹垣から遠くに目をやりニンマリとする。この瞬間から、まだかまだかと待ち続けた百を超える心臓が早鐘を打ち始める……

休憩時間、収容人たちは監獄内へ戻り顔や手を洗うのも忘れて、駐屯所の入り口をじっと見つめる。

「お！　きたぞ！」

駐屯所の老守衛と看守とが囚人の点呼をとりに、そしてもちろんのこと手紙を配布しにきたのである。風に吹かれ絹糸のような白髪がゆらゆらとゆれる長身屈強の老人は、小柄な看守が人差し指を掲げてブツブツ人数を数えるあいだ、にやにやしながらみんなの顔を見まわす。

「全員揃っております、郵便局長殿（Com-bo-le me-su sep-do-pot）」

すぐさま《郵便局長》は書類ケースを開き、すでに封が切られた封筒を一・二通手渡すために、手紙が送られてきた人々の名前を静かにひとりずつ読み上げていく。封筒にコメントが書かれていれば、みなで爆笑できるようそのコメントを読み上げることを忘れなかった。《家人がハノイの情勢に言及しているため、検閲一ページ》、《○○番、長

すぎる手紙はいかんと家族に伝えよ》、《〇〇番夫人、旦那に一度に三通も送るとは何事かね。そのうち一通は返送……》

これらのコメントはすべてホアビン省行政長官の直筆によるもので、ヴバンの政治犯たちと彼らの家族友人たちとの間を行き来する書信すべての検閲を行政長官が自らおこなっている。封筒の外に書かれたコメントは月並みのものだが、封筒内の手紙には崇高な哲学とともに諷刺と諧謔をはらんだ、これぞまさしく文学の傑作ともいえる文章が横たわっている。あるひとによれば、《行政長官》はいつも真夜中に阿片の盆とランプを脇に置き、夢うつつに横たわりながら手紙を検閲しているそうだ。確かに、芙蓉［阿片のこと］の門徒の覚醒なしには、錦繡のことばを産み出すことはできまい。

よって、家族からの手紙を受けとる場面はいつもざわざわ騒がしい。収容人たちはそろって《行政長官》のコメントを読み上げ、みなが大笑いする。

「誰かが言ってたけど、やつはフランス人とのハーフらしいな」

「いや、やつはベトナムの血が三分の一入った混血だそうだ。やつの父親は《正統なフランス人》で、母親がハーフらしい」

「ハーフ、三分の一、四分の一、どれであれ混血は混血だ」

「やっこさんに会ってみたいなぁ。これほど狡猾でやんちゃな人間が、いったいどんな目鼻立ちをしているのか見てやりたい」

収容人たちがヴバンにやってきて一ヶ月が過ぎ、老守衛がこれまで三度も行政長官の近日中の監獄訪問を告げたにもかかわらず、依然として彼はやってこない。そのため、あれこれと要求が書かれた嘆願書は警備官の革鞄のなかに圧し潰されたままである。期待のあまりにヤキモキし、みなが怨みや誹りの言葉を口にした。その一方で、手紙は期日通りにきちんと届けられ、これらの手紙には相変わらず魅力溢れた批評とともに詮索好きな文句が添えられている。

「あのやっこさん、ひょっとすると諷刺作家なのかもしれぬ」

タイは身体をよじらせ笑いこけ、受けとったばかりのハノイにいる友人が贈ってくれたフランス語の小説一冊と、その表紙にフランス語で書かれた慰めの言葉をみなに見せた。

煩雑でお粗末なこれらの言葉は《ホアビン省フランス行政長官》の肩書きと、コメント人の署名の下に略筆された《lu》〔フランス語で「読んだ」の意〕の一文字によって価値が高められ、ひとびとの目を引くものとなった。すると、その脳味噌には植民地統治にとっての危険思想が溢れていること間違いなしの、老守衛から《第一級の哲学者》と命名されたタイが解説をはじめた。

「やつは友の言葉をこき下ろしてやがるんだ。こうやって書き加えることで、本の贈呈者の阿呆さ加減と軽率さをやつが注意深く読んだということを、暗に伝えようとしているんだ。このやっこさん、手に負えないやつだぜ！」

大きな笑い声がひびき渡った。このように自由が不足した場所では、ひとは心の底から自由な言語と立ち振舞いを欲した。その後みなで寄り集まって、本の贈呈人を餌食にした。

「またなぜベトナム語を使わずに、やつに小衝かれるようなフランス語で書いたんだか」

「あまりに言葉に浸りすぎて失敗したってわけだ！」

「本を読み終えたら送り返して友に読ませてやれよ！」

囚われの身の憂さが少しでも晴れるよう、だれもが興奮した様子で悪態を吐きまくった。彼らはまるで常にただ何かに怒りをぶちまけることで、自らの身体から鬱憤が抜け出ていく機会を待っているかのようだった。

それ以来、みなは手紙の検閲者兼批評家に会いたい気持ちをさらに強くしていった。

誰一人彼のことを考えなくなったある日、不意に彼がやってきた。事前通知なしの突然の訪問で、坂道を走り上る車を見かけなかったため、監獄の人間で彼がいつやって来るかを知る者は誰もいなかった。

午後、作業終了のラッパの音が鳴る前に行政長官を迎えるため収容者たちは監獄に戻らされた。ある者がポカンとしながら尋ねた。

「彼はいつここにきたんですか？」

一人の兵士が答えた。

「上官は十一時にお越しになったが、車はチャウ官吏の邸宅へと直行した」

「なぜ先に監獄を訪れなかったんだろう？」

「チャウのところで吸引するためだろうが！」

「彼は老守衛を好いてないと聞いたことがある」

またもや収容人たちに議論のネタが与えられた。し

かし彼らも盛大な歓迎の準備をしなければならなかった。掃き掃除をし、薪を積み直し、蚊帳を結びまとめた。清潔で繕われた衣服へ着替えたのち、彼らは庭に出て整列した。

待ち遠しい半時間。門での号令。車のエンジンが止まる音。そして監獄の門が開いた。口元が微かにゆるんだ赤ら顔の行政長官が無言で入ってきた。そのあとに老守衛、郡長官チャウ、医師とホアビン省長官補佐が続いた。彼は地元住民から見れば中背の、しかし役人たちとくらべれば小柄な人間であった。父親の血による青く濁った瞳、薄い唇、高い鼻、一方撫で付けられた黒褐色の髪がベトナムの血の流れを物語っている。

老守衛によるちょっとした紹介のあと、警備官が嘆願書を手に進み出て長官に近づいた。不意に収容人全員に冷や水が浴びせられた。混血フランス人による冒頭の発言と振る舞いは、手紙のなかの茶目っ気あるコメントによって産まれ出た情感を、即刻バッサリ切り落とした。彼は警備官を手で追い払い厳格な表情で言った。

「あなたがたは今、行政長官を目の前にしていることを心得なければならない」

いかめしい言葉に、カィンはなんらかの諧謔の意が示唆されているのだろうと、隣りの人間をつついてこっそりにやついた。《やつは手紙の検閲や批評と同じように、俺たちを冷やかしてからかっているんじゃなかろうか？》

しかし違った。彼はからかってなどいなかった。彼は声を高くして演説を始めた。

「おい、知っているか、あなたがたはひどくちっぽけな存在である！　私はあなたがたよりも賢く、あなたがたよりも多くの知識を有している。さらにはあなたがたよりも高貴な家の人間だ。私があなたがたに伝えたいことは、あなたがたはただの小さな幼子であるということだ……」。演説は半時間にわたり、手厳しい誹謗が続いた。その結論は次のとおりである。

《獄中の全員に対し、半月間家族に手紙を送ることを禁止する。理由は、行政長官が下の道を通りすぎるあいだに、幾人かの者がはしごの上から無礼にも見下ろしたためだ》

演説を終えると罰令を投げつけ支配者は監獄の嘆願書も忘れ、気の昂ったお偉いさんがたを引き連れ激昂とともに駐屯所へと移動していった。

当初監獄は、急に毒を帯びた空気が下りてきてその毒

に包み込まれたかのようだった。だれもが呆然として黙りこんでいた。ある者が狂ったかのように、書いたばかりの手紙をビリビリと破り捨てた。《送付が許されないなんて、どうしろというんだ。クソが！　明日は手紙の日だというのに！》この憤怒の様相のせいで、収容人たちの悲しみは消え去り可笑しさのあまりみんな一斉に爆笑しだした。彼らの笑い声がひどく大きく響いたため、門の見張り番の十三番が戒めなければならなかった。《静かに、静かに。上官に聞こえたら痛い目にあうぞ！》収容者たちは、さらなるネタを笑いとばすことでそれに応答した。すると、ほろ酔い加減のような声が言った。

「上官？　上官、あなた様はほんとうに偉大なかたですわ！　ちっぽけなわたしたちにはとても追いつくことなどできやしません！」

リンは演説の一部を西洋人風に真似た。《あなたがたはひどくちっぽけな存在だ！　私はあなたがたよりも賢く、あなたがたよりも多くの知識を有している。さらにはあなたがたよりも高貴な家の人間だ》また笑いの機会が訪れた。監獄は祭りの日のように騒がしくざわめいた。みんなで大笑いをすると、ひとは望みがひとつも叶えられない鬱屈を忘れる。しかし、どれほど楽しい時間にも際限があり、ひとはまた納得のいかない事柄について考えはじめる。懐疑的で臆病な男子の思考は、つねにあらゆる物事の想像上の原因を見つけ出す。

「僕がみんなに嘆願書は先に駐屯所の人間に提出してからだと言ったのに、みんなは耳を貸さなかった。結果、彼が行政長官に僕らを懲らしめるようあおったんだ」

「俺らを懲らしめることのできるやつなぞいやしないさ」

「ではやつより上の官僚に直接嘆願書を渡そうぜ」

「なんの解決にも至らなければ、家族が面会にやって来たときにハノイまで持ち帰ってもらって、上の官僚に送りつけてやろう。総督にも送ってやるんだ！」

ある者は、非難の声を上げた。

「これはただ単にはしごの上からやつを見下ろしたやつらのせいだ」

「それは誰なんだ？　なんてばかなことをしやがった？」

リンが叱りつけた。

「そいつが誰だと？　ことはすでに過ぎたことだ。やつは俺たちに威厳を示そうとそのきっかけを探していただけであって、これでなければまた別のきっかけを挙げたはずだ。

今回の原因は、はしごではなく別のところにあるんだ。やつは、ここで働く人間たちを煽動しようと俺たちが動いているのではないかと疑っているんだ」

話題は方向を変え、年若い部隊や焚き木拾いの森での詩酒の宴へと移り、再度はしごへと戻っていった。

「ナム君は今回の旅でソンラへ旅立つ！〔ソンラには仏植民地時代に建てられた有名な監獄があった〕このはしごは誰が作ったのかとやつが訊ねるので、その功績を誉めてもらえるかと思えば、やつに皮肉られただけだった」

フランス語を解さない者が尋ねた。

「やつはどう皮肉ったんだい？」

「彼は高い所が大好きで、のちには尚書〔中国隋唐王朝の政治制度、三省六部の六部の各長官を尚書と呼ぶ〕までのぼりつめると、やつは言いやがった」

みながまた笑った。

「もっぱら低い位置だけを望んでいますと、やつに返してやればよかったのに。例えば、ホアビン省の行政長官とか」

その日の夜、狭苦しい三つの部屋に押し込められた後、みなはそれぞれ蝋燭を灯して集い、消灯のラッパの音や《巡回》する監獄管轄人の恫喝を聞き流して、ホアビン省行政長官について夜遅くまで話しを続けた。

駐屯所の兵隊全員から敬愛され、つねづね大事なニュースを報せてくれるタイによれば、今日行政長官の気性が荒かったのは、阿片か何かの訴訟に関して外国人神父に対し苛立ちを覚えていたからだという。みなは長官にとっての恐るべき敵対人物と察し、即座にこの修行者に親しみを抱いた。二人の羊人に関わる何らかの秘密を知る者は、それを仲間たちに話して聞かせた。そして他の晩と同じように慎みなど知らぬ顔で、彼らはたびたび大声で笑った。

「モームの短編だよ、みなさん」

タイが宣し、それにカインが続いた。

「タイトルは、『行政長官と神父』」〔モームの短編に『キューピッドとスエールの牧師』がある〕

「いや、タイトルは『宗教と統治』だ」

リンが正した。

「いいや、『阿片の煙の影響』だ！」

「まだピッタリ当てはまらないな。『諧謔の統治者』か…」

ある者が近寄ってきて小声で囁いた。

「監視兵は長官のスパイだぜ、みんなもっと声を抑えなきゃ」

小蟹のような弱虫男に向かってみなが怒鳴り散らした。
「黙れ！　やつが恐いのならもうおねんねしろ！」
「だけど、みなさんは監獄全体を巻き込んでいく……」
自分に有利なときだけ雄々しくなるティエンの威嚇で、すぐさま彼はそっといなくなった。
「口をつぐめ！　さもなきゃぶっ叩くぞ！」
話は重たい煙に満ちた空気のなか、夜半を過ぎても延々と続いた。なぜなら不公平な統治者たちに反感を抱いた警備官が、今夜は思う存分好きなだけ煙草を吸うことを許してくれたからである。

★

あの特異な出来事が起きてから十日が経った。手紙禁止令が半月から一週間へと短縮されたこともあって、みんなはあの日の出来事を忘れた。しかし、手紙に記されたこれまでと同じようにたんたんとしていたずらなコメントを吟ずるとき、みなの記憶のなかの行政長官の姿は決して色褪せることはなかった。
それから数日後、誰も待ち望んでなどいなかったとき、再び行政長官が監獄を訪れた。今回はハーフの女性で小さく美しい聡明な顔立ちをした夫人と、髪の毛を綺麗にでつけた身なりの良い七・八歳の息子と一緒だった。彼は真っ直ぐチャウの家へ赴き朝食をとった。そして酒で赤ら顔になった彼が、妻と息子を共に引き連れて監獄にやってきたのである。珍事である！
彼の性格は豹変し非常に穏やかで傲慢さのかけらもなく、ふらふらとあちこちで親しく会話を交わし可笑しく愉快な言葉を口にして、みなは笑いをこらえることができなかった。
タイは隣りにいる人間の耳に近寄って囁いた。《たぶんあいつは狂っているんだ！　もしくは、酔っぱらってさらに腹一杯吸い込んできて陶酔状態なんだ》
行政長官の愚ろな言葉が添えられた手紙とプレゼントが渡されたことで、この臆測は即座に修正された。
「ついでにあなたがたにこれらの手紙を持ってきたよ。今日はまだ手紙の日ではないのだけれど」
ということは、彼は酔っぱらう前から良心的であったのだ。
しかしこれで終わりではない。今回出された要望はひとつ残らず認められ、そのため老守衛は何度も反対意見を

投じなければならなかった。

役人たちが立ち去ったあと収容所のみなは歓声を上げた。ある男は頭を左右にふり、チャン・チン［預言者として名高いグエン・ビン・キィエム，1491-1585のこと］の予言を読み上げた。《不戦自然成！》

その日の夜、要望どおり監獄のみなは初めて窓を開けて眠ることができた。そして、みなは上弦の月光のもと夜遅くまで庭を歩きまわり、植民地支配者の滑稽で理解しがたい性格を誉め称えた。

「これは身体に毒な気候と阿片のせいだ！」

こうしたリンの概評でもっても、あの変貌を説明することはできなかった。

つい先日、驚くべきニュースが監獄に舞い込んできた。行政長官が更迭され、中部のある省の副行政長官に命じられたというのだ。このニュースの詳細はといえば、怒り心頭のあまり正気を失った彼が、勢力を張る裕福なフランス人プランテーションオーナーと少数民族ムオン族との間に起きた畑地争いの件で、ホアビン省に取り調べに来た検察事務官の目の前で、このフランス人オーナーに対し自らの手で平手打ちを食らわせた。おそらく彼は、植民地支配者たちのあいだでは馴染みの伝染病、要するに精神疾患を患っていたのだ。事務官は怒りに狂ってその場を立ち去り、数日後行政長官はハノイに呼び戻された。それ以来ヴバン監獄のひとびとは、混血フランス人のおもしろ可笑しいコメントを読む楽しみを完全に失った。政治犯仲間にとっての《愛すべき》人物が左遷されたのち、忽然と。

〈解説〉

『省行政長官』は「自力文団」主要メンバーであるカイ・フンの短編小説で、ベトナム国民党機関紙『正義』十六号（一九四六年九月十六日）に掲載された。

舞台は、ハノイ南東約百キロメートルに位置するフランス植民地時代の監獄。作品内にムオン族が登場するように、少数民族が多く住む山地である。カイ・フン自身、一九四一年から二年間、この監獄で政治犯として囚われ、その間長編小説『煩悶』（一九四三）を執筆している。

舞台である監獄とともに注目すべきなのは、ベトナムの血が流れる混血の仏植民地当局行政長官である。これまでの訳者のリサーチでは、仏植民地時代の混血児を描いた作品は稀少である。（カイ・フンの未完小説『軛』からは、多くの混血児が植民地当局に仕える秘密警察として働いていたことがうかがえる）この時代の混血児について、小松清は著書『仏印への途』（一九四一）で「佛印の混血兒は蝙蝠のごとき存在である。フランス人のあひだでは安南人並みに扱はれ、安南人のあひだでは最下等なフランス人としての扱ひをうけなければならぬ。［…］この人種がどうして秀れた天性や素質に恵まれ得ようか」と述べているが、こうした不条理を知る混血こそが、換言すればこうした世界観の混淆こそが、秀れた天性や素質をはらむことを、『省行政長官』から読みとることができるであろう。

ベトナムの血が流れる行政長官は二つの顔を持つ。統治者としての面目を保たねばならぬ一方で、監獄の収容者そして少数民族など弱者に寄り添う心、他者に共感する心を持つ。このように青い瞳をした黒髪の長官の世界観は混淆している。世界観の混淆に関して言えば、囚われの身であるベトナムの政治犯たちも同様である。ヴバン監獄に政治犯として囚われた大多数の人間は、ベトナムの青年知識人であった。小松清は彼らのことを「精神の上での混血兒」と呼び、「安南人でありながら［…］フランス化してしまった一部の知識人」と説明したが、カイ・フンの経歴を例に挙げてみても、幼少時には漢語で『四書』を学び、フランス語で西欧の哲学や科学を吸収し、ベトナム語で執筆をしている。この点において、監獄の収容者たちは、唯一無二の単一言語体系にとどまっている人間たちよりも、はるかに豊かな感性を有し、新たな世界観への可

能性をはらんでいると言えるであろう。七十年前に執筆された作品ではあるが、純化や排除への傾向が顕著となってきた現世界に一石を投じる作品でもある。（訳者）

テキスト：